

「感想」考

名古屋石田学園 法人本部 顧問
星城大学 学長補佐 深谷 孟延

1. SI 君の感想と授業者の願い

色々な意見を聞けてよかったです。1 つの事柄にここまで深く考えることはあまりないのでよかったですと思います。ただ事件の名前を覚えるだけでなく色々な面から物事を見れてよかったです。（平成 24 年 6 月 11 日記述）

SI 君が、上記のような感想を書くことになった理由を、石川先生の研究計画書に見てみたいと思う。石川先生は、平成 24 年 5 月 15 日、次のような文章を書いている。

日本史 A は地理歴史科に属する標準単位数 2 単位の科目である。特に江戸時代以降、明治・大正・昭和を学習し、近代社会が成立し発展する過程に重点を置いて考察し、世界の中の日本という視野に立って理解させることをねらいとしている。

これまでの授業では、とにかく必要な事項を覚えさせることを中心にしてきた。生徒にある事項に「なぜ」という部分を考えさせる作業をあまりさせてこなかった。しかしながら、学習課題に対して「なぜ」という疑問を持ち、それを追究していく事こそが生徒の歴史的な見方や考え方を身に付けさせる原動力となるのではないか。

現在から考えておかしい、不思議に思うことで、生徒が興味を持つ疑問の学習課題を「なぜ」とするが、ただ単にある事件が発生しましたで終わらせるのではなく、それが「なぜ」起き、国際社会の中でどのような意味を持ち、現代の日本社会とどのような関連性を持っているかを考察させたい。事件の当事者及び当時の国民一般の認識はどのようなものであったのか。またそこに地理的要因はどのように関わってくるのかなどを総合的・多面的に追究し表現する主体性を育成する事が、歴史的な見方や考え方を身に付けさせるために必要である。従って極力「なぜ」という部分にこだわって授業をすすめていきたい。

2. 研究テーマと授業デザインの基本的構想

石川先生は、自分の今までの実践に対する先のような思いから「主体性を持って歴史的な見方や考え方でできる生徒の育成」をテーマとし、サブテーマを「生徒が興味を持つ授業デザインの模索」と設定して実践に入ることにされたのである。そして、授業の基本構想を下記の5つのプロセスをもってデザインされることになった。

- (1) 生徒が興味を持つ学習内容から「なぜ」という疑問の学習課題を生徒の立場に立ちながら教師が想定する。
- (2) 学習課題を追究する。
- (3) グループでの話し合いをもとに学習課題に対して自分自身の意見をまとめる。
- (4) グループでの話し合いをもとにクラス全体での話し合いを行う。
- (5) 主体的に考えをまとめる。

3. 単元「開国と維新」の目標と学習計画（4時間完了）

—単元目標—

- ① 日米和親条約・日米修好通商条約の内容に注目し、領事裁判権の承認や関税自主権の放棄など日本側にとって不平等な条約であったことを理解させる。
- ② 欧米列強によるアジア進出の状況を把握するとともに、それによって、日本の対外政策が「鎖国」から「開国」へと変化していったことを理解させる。
- ③ 開国が日本にどのような影響を与えたか考察させる。

—学習計画—

時間	各時の目標	学 習 活 動
第 1 時	ノルマントン号事件の判決が無罪になった理由を考える (不平等条約の背景をさぐる)	・スライドを見る ・判決を考える ・グループの意見をまとめる ・無罪判決の理由を発表する
第 2 時	ノルマントン号事件の無罪判決の根本的理由を探る	・日米和親条約・日米修好通商条約を読む ・2つの条約とノルマントン号事件の関連を考える ・2つの条約に含まれている不平等の内容を理解する

第 3 時	不平等条約を結んだ国外事情について	<ul style="list-style-type: none"> ・なぜアメリカは日本に条約締結を求めたか考える ・日米和親条約締結に至る過程を理解する ・日米修好通商条約締結に至る過程を理解する
第 4 時	不平等条約を結んだ国内事情について	<ul style="list-style-type: none"> ・なぜ日本は不平等条約を結んだのか考える ・当時の幕府の状態を理解する

こうして、平成24年5月31日から6月11日にかけて実践され、4時間目の終末時に書かせたのが冒頭の「SI君の感想」である。

4. 6月授業実践に対する生徒の受けとめ方

SI君以外に幾人かの感想をひろってみるとともに、全員の授業実践に対する受けとめ方をまとめてみると次のようであった。

- SHさん — ノルマントン号事件、不平等条約などを改めて学習し、皆の意見も聞けて、前より理解できてよかった。
- NB君 — 戦争と政策についてよく理解出来たんじゃないかと思います。1人1人が考えて意見を話し合う場が増えたのでちょっと大変でした。また話し合うことで新たな疑問が生まれ、とても興味を持てる授業でした。
- TD君 — 見なれない先生方やその他の人がみえたり、(授業を)ビデオカメラに納めらたりと、緊張しっぱなしでしたが、自分なりに授業に入り込めたし、集中もできたので、今回の4時間にわたる授業はとても良いものになりました。
- YY君 — グループで話し合って発表したりする授業はあまりなかったので楽しかった。

5名の感想から、概ねどのような授業実践であったか十分想像できる。SI君の「ただ事件の名前を覚えるだけだなく」、SHさんの「皆の意見も聞けて」とかNB君の「話し合うことで」、TD君の「自分なりに授業に入り込めた」やYY君の「楽しかった」に至る生徒の感想から考えると、石川先生の「授業の基本構想の5つのプロセス」は、生徒達に概ね好評であり生徒達の期待する「授

業」であったのではなかろうか。

石川先生が、生徒全員の感想を集計すると下記ようになった。

楽しかった・よかったと書いた生徒	28人
緊張した・疲れたと書いた生徒	6人

5. 11月実践「日清戦争」の指導案（一部）

石川先生は、平成24年10月29日から、4時間下記のような実践をされた。

- (1) 単元名「近代国家の形成と発展」 小単元名「清国との戦い」
- (2) 小単元目標
 - ①なぜ日本は日清戦争に向かって行ったのか、その結果はどうなったのか考察する。
 - ②日本は戦争の一方の当事者であるが、それ以外で多くの国が関連していた事を把握する。
 - ③東アジアにおける列強の帝国主義の動きに日本も組み入れられていく事を理解する。

(3) 第4時指導案（平成24年11月12日実施）

本時の目標—なぜ各国（列強）は清国に進出しようとしたのか。

段階	教師の活動	時間 (分)	生徒の活動 (指導上の留意事項)
(略)			
課題	なぜ列強は競って鉄道の建設を企てたのか？ ・前時配布した地図を拡大し準備しておき張り出す→史料を基に各国の鉄道の範囲を地図に書き込む	20	予想される意見 ・大量の人や物を運ぶため ・多くの人を集めることによって自分達の勢力範囲を他国の侵略からまもる
	各自で考えた所を出し合い班で話し合う	28	予想される意見 ・鉄道を建設する権利とともに鉱山採掘権を手に入れているので鉱山を採掘し、それを運ぶため ・ロシアは自国の農産物等を運んできて港から船で各国に輸出しようとした

追 究	<p>話し合いの結果を班毎に発表させる質問（生徒もしくは教員）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生徒の「鉱産資源が必要」に対し「それは何の為か？」 ・生徒の「大量の物資」に対し「具体的にはなにか？」 ・本国で工業製品を作るため ・生徒の「大量の物資」に対し「何のために本国へ資源を送り本国から工業製品を運んでくるのか？」 	40	<p>発表の後に質問を実施するが発表者以外の班員に答えさせる</p> <p>予想される意見</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本国へ運ぶ資源と本国で作られた製品 ・本国で大量生産を行い製品を清国で売ることによって利益を得る ・租借地で安い労働力を使い製品を作る
ま と め	<p>日清戦争を通して学習したことや感想をプリントに書く。</p>	50	<p>各自でまとめたものをプリントに記入する。</p>

6. 再びSI君達の感想から思う

先に示した5名の生徒は、4時間目の終末時に「日清戦争を通して学習したこと、感想」で次のように書いた。

- SI 君 — 中学校では、清・日本・ロシアとの3つの国の関係しか学べなかったが、高校では、イギリス・フランス・ドイツとの関係も学べて良かったです。さらに今後、この6ヶ国との関係がどうなっていくのかを調べてみたいと思った。鉄道を作った理由をもっと深く調べてみたい。
- SH さん — どの国も朝鮮がほしかった。日清戦争は、日本と清国だけでなく、色々な国がちよっとずつ関わっていた。
- NB 君 — どの国も必死に自国のことだけを考えていた。朝鮮をどこも欲しかった。これらを通して、日清戦争についてよく理解できたと思います。
- TD 君 — 「日清」という名前を見ると、日本と中国だけの話し合いに思えるが、実は、多くが関与していた。

YY 君 — 日本と中国は、昔はどのような関係だったのかがよくわかった。中国だけでなく、他の国の情報などもわかり、とても楽しかった。

SI 君は、日清戦争後の 6 ヶ国の動向に目を向けており、SH さんは日清戦争が清国との関係のみならず色々な国とかかわっていることを理解し、NB 君は当時の列強といわれる国々が自国のことを必死に考えていたことにふれている。また、TD 君は暗に表面上の言葉を覚えるだけでは歴史を学ぶことでないことを知ったようであり、YY 君は当時の国際関係を学ぶことから楽しい学習であったことがうかがえる。11 月実践においても、5 名生徒の感想は好意的である。

6 月実践の感想と比較すると、6 月は学習方法の新鮮さが多かったが、11 月では学習内容にふれる生徒が多くなってきていることがわかる。しかし、願わくば、もう少し学習内容に具体的にふれた記述がほしいと思う。そのためには、自分の考えを書くことの重要性や必要性を日頃から生徒に指導しておくことが求められるであろう。

生徒達の感想から考えるに、石川先生がテーマとした「主体性を持って歴史的な見方や考え方のできる生徒の育成」についての結論は明確に出せないが、サブテーマの「生徒が興味を持つ授業デザインの模索」には多少なりとも迫れたのではないかと思う。

教師は教材内容を少しでもわかりやすく説明したり解説することに心をくさそうとする。そのために、生徒達が調べたりグループで話し合ったりする授業では、教材内容が明確に理解されないのではないかという不安におそわれることになる。授業を教える人と教えられる人という関係でとらえる限り、一斉講義式授業からなかなか脱却できないことになると思う。そこで石川先生は、生徒が自らいかに理解・認識して行くかを大切にされようとした。すなわち、覚える歴史学習から考える歴史学習に転換し、生徒の主体性を大切にしたいと心がけられたのである。石川先生の「なぜ」を柱にした歴史学習のあり方は、今後研究が進むであろう。